

Newsletter

日本在宅ケア学会

発行日：2009/07/06

No.2

日本在宅ケア学会事務センター
〒105-0001
東京都港区虎ノ門3-7-2 大橋ビル2F
TEL:03-3431-3715
FAX:03-3431-3325

新理事長あいさつ

白澤 政和（大阪市立大学大学院）

今年の3月14日の日本在宅ケア学会総会において、理事長に再任されました。これで、理事長として2期目に突入することになりますが、学会員の皆さまのご協力・ご支援をいただき、学会の発展に努めてまいりたいと思っています。

本学会は、介護保険制度創設に先駆けた1996年に創設され、今年で13年目を迎えます。この間、「要介護者を地域で支えるコミュニティ・ケア」をスローガンとし、在宅ケアへの社会的関心も高まり、900名を擁する学会にまで順調に成長してきました。学会の顔である学会誌も、年に2号刊行され、多くの投稿原稿を頂戴するようになりました。ただ、日本の在宅ケアには多くの問題が山積しており、その課題解決に向けて、本学会の社会的な責任は極めて大きいといわねばなりません。

本学会の特徴は、在宅ケアに関して、1つには研究者と実務者が交流を深めて多くの在宅ケアに関するエビデンスを蓄積していくことにあります。もう1つは、在宅ケアにかかわる医学、看護学、保健学、理学療法、作業療法、栄養学等の医療系の方々と、社会福祉学や介護学といった福祉系の方々が参加し、交流することで、在宅ケアの水準を高めてい

く学際学会であるということです。

ところが、前者の現状としては、研究者の割合が約7割と高く、実務者の入会については最近増加傾向を示していますが、やはり、研究者に比べると実務者の割合が低いのが現状です。今後の日本での在宅ケアを推進していくうえでは、実践現場からの参加者を増やしていく必要があります。後者の研究領域については、看護学の研究者・実務者が大多数を占め、とりわけ福祉系の研究者・実務者が少ない状況にあります。今後は看護学以外の研究領域からの研究者・実務者にも参加していただく方策が求められています。

これらの課題の解決に向けて、今期より理事の定数を12名から16名、評議員の定数を30名から40名と拡大させていただき、課題の解決に向けての基礎がつくられつつあります。今回選出された理事・評議員の皆さまといっしょになり、課題解決に向けて邁進していきたいと思っています。

一方、学会の財源基盤も安定してきており、実務者の会員が増えることができれば、事例・症例研究に関する雑誌の刊行も新たに企画していかなければならないと考えています。また、本学会の将来をにになっていただくべく、若手の研究者・実務者の方に研究方法についての学習機会をつくっていきたくと思っています。なお、当学会の「倫理綱領」については、今年度の総会にて承認を受け、研究にお

いて倫理的な配慮をいかに進めていくのかについて一層検討していくことが求められています。さらに、学会としての社会的責任を果たしていくために、在宅ケアの従事する実践現場の皆さまに向け公開講座、在宅ケアにかかわっている家族等の社会に対する公開講座等、を推進していくことも重要となっています。

第 13 回 学術集会報告

学術集会長：黒田 研二（大阪府立大学）

2009年3月14・15日の2日間、大阪府立大学中百舌鳥キャンパスにおいて第13回日本在宅ケア学会学術集会を開催した。メインテーマを「誰もが安心できる地域ケア、つながりのある地域づくり」とし、在宅ケアに関し地域全体を視野にいれた議論を盛り上げることを企画した。

特別講演を惣万佳代氏（このゆびとーまれ）にお願いし、「あったか地域の大家族；富山型デイサービスの15年」という題でお話いただいた。「制度があって活動したのではなく、町にニーズがあって活動し、あとから制度がついてきた」という指摘が胸に響く内容であり、在宅ケアが志向しているものは、これからの地域づくりにほかならないという思いを新たにした。2つのシンポジウム「認知症と地域ケア」「災害時とその後の地域ケア」も、それぞれが、地域における「安心」「つながり」を目指す重要な議論の場となった。15日午後の3つの分科会「ケアマネジメント」「小規模多機能ケア」「ALSの在宅ケア」においても、それぞれ熱心な報告と議論がなされた。

学術集会長講演「病院と地域をつなぐ多職種連携」では、病院から在宅ケアへの移行における医療ソーシャルワーカーの役割と多職種連携の必要性を確認した。なお、14日午前

の公開講座では、宇都宮弘子氏から病院看護師による退院支援について、三田優子氏から障害者施設からの地域移行を含む生活支援について話していただいた。在宅ケアに取り組むうえで、病院や施設からの移行支援とその際の機関連携、多職種連携がいかに重要であるかを確認できたと思う。

一般報告は、口演・示説を合わせ、130題。第13回学術集会参加者数は、14日午前の公開講座参加者を含めて500名余であった。後援団体となっていたいただいた専門職団体、大阪府、大阪市、堺市および同社会福祉協議会からの広報も、有効だったと思われる。後援団体、研究報告や座長をしていただいた会員諸氏、企画運営委員、実行委員、さまざまな形で学術集会に参加し、盛り上げてくださったすべての皆さまに、この場をお借りして厚くお礼申し上げたい。

2008年度 公開講座

委員長：加瀬 裕子（早稲田大学）

2008年度の日本在宅ケア学会公開講座は3月14日、大阪府立大学にて開催された。

当日は、雨の降りしきる悪天候であったにもかかわらず、公開講座には、地域の専門職や当事者の参加を広く呼びかけたことから、会員・非会員を合わせ約200名の参加者を得られ、また、聴覚障害者のために筆記要約のサービスも用意された。

公開講座1は、「障害者の自立と地域生活支援」と題して、三田優子氏（大阪府立大学人間社会学部）が講演を行った。三田氏は、大学に勤務する以前より愛知県コロニー発達障害研究所の研究者として多くの障害者にかかわってきた経験を活かし、今回は、精神障害をもつ人々を調査した結果から、精神障害をもつ人々が地域で生き生きと暮らしている様子について報告が行なわれた。訓練を強要する施設では発揮できなかった力が、地域

で暮らすようになり発揮されている事例が示され、医療職や専門家が見落としがちな精神障害者の強さに依拠した支援の大切さが指摘された。

精神障害を抱える人に対しては、いかに強制することなく生活全体を支えることができるかという、在宅ケアの課題が提起された講演であった。

調査を通じて、多くの精神障害者が自分の生活について披瀝し、地域生活支援強化のために発言する姿は、会場の共感を呼んだ。

公開講座2は、「より良い在宅ケアにつながる退院支援」と題して宇都宮宏子氏（京都大学医学部附属病院地域ネットワーク医療部）が講演を行った。宇都宮氏は、急性期病院勤務の後、高松・京都と訪問看護師としての勤務経験から、入院時のケアならびに地域でのケアの連携の重要性を認識していた。24時間3交替の入院時のケアから、独居や昼間に介護者がいないところいきなり帰そうとする「退院調整」について問題意識をもち、入院早期から退院支援が必要な患者を把握して準備を進めることで、スムーズな在宅医療への移行を実現しようとする京都大学医学部附属病院地域ネットワークのシステムの構築を目指した。

退院支援のプロセスは、入院時に、退院支援が必要になる患者か否かを特定する。検査・治療・リハビリ等の状況から、退院後も継続すべきケアについて主治医等と検討し、患者・家族と共有する。ケアマネジメントを行う。という3段階に分かれる。第1段階では、病棟看護師が主体となり、入院時スクリーニングシートを用いるなどして、居住形態および介護者の同居の有無、利用している在宅サービスの状況などを把握することである。退院調整が必要と判断された場合、第2段階にて「退院支援カンファレンス」を定期的で開催することが提唱され、在宅ケアのスタッフにコンサルテーションを行なうことの

重要性が指摘された。

2つの公開講座の講演は、最新の情報を聴衆に提供するとともに、実践と結びついた研究を志向する日本在宅ケア学会にふさわしい、貴重な講演であった。

倫理委員会報告

委員長：瀧澤 利行（茨城大学）

日本在宅ケア学会では、2009年3月に開催された第13回日本在宅ケア学会総会において、日本在宅ケア学会倫理綱領を制定いたしました。これに伴い、会則その他も追って改正されることとなります。

倫理綱領の制定によって、本学会員においては、研究発表および学会誌の投稿に際してこれまで以上に倫理的配慮を行き届かせたうえでの発表および投稿が求められるようになります。すでに学会誌の投稿にあたっては、一定の倫理的配慮に関する項目を設けることが求められていますが、2010年1月聖路加看護大学にて開催される第14回日本在宅ケア学会学術集会においては、研究発表の抄録提出時に一定の倫理的配慮に関するチェックリスト用いて自己点検をしていただくことが必須となりました。

研究発表者は、研究経過およびその成果（抄録・発表内容）について、日本在宅ケア学会倫理綱領に基づいて、チェックリストの項目に関する点検をしたうえで抄録を提出していただくかなければなりません。

チェックリストは文献引用の明確性、研究に用いるデータを改変していないこと、研究参加者への説明と同意、データ収集の場における責任者の同意、研究過程で対象者に苦痛や不利益などを与えていないこと、データの管理の適切性、匿名化、発表に関する同意を得ること、などにわたります。詳細につきましては、会員にお送りいたします「第14回日

本在宅ケア学会学術集会ご案内」にチェックリストを同封しますのでご確認ください。研究発表者は、そのチェックリストに従い、発表内容および抄録の内容について自己点検していただくうえで、学会HP (<http://jahhc.umin.jp/>)より演題抄録をご登録ください。抄録を大幅に変更される場合には、チェックリストの再提出が必要となります。発表当日の資料等につきましては、今年度の学術集会ではチェックリストの提出は必要ありませんが、必ず自己点検を行ってください。このチェックリストに不備があ

る場合には、演題抄録の発表が受理されないことがありますので十分注意してください。

科学的研究の分野では、今後ますます倫理的配慮に関する研究団体の義務が強く課されるようになります。今後も倫理委員会においては、日本在宅ケア学会にふさわしく、かつ研究倫理全般を網羅した倫理的諸基準を検討し、随時会員に情報提供していくことに努めますので、会員の皆さまも倫理的配慮について一層の関心をおもちいただけるようお願いいたします。

第 14 日本在宅ケア学会学術集会

テ　　マ：その人の生涯と家族を支える在宅ケア

学術集会長：麻原きよみ（聖路加看護大学）

会　　期：2010年1月23日（土）～24日（日）

会　　場：聖路加看護大学

学術集会プログラム

【1月23日（土）】

- ・シンポジウム　：在宅ケアの最前線
梶原　厚子（訪問看護ステーションほのか）
柴田　範子（特定非営利活動法人「楽」, 東洋大学）
長谷川　幹（桜新町リハビリテーションクリニック）
松木満里子（アコモ・ケアサービス株式会社）
- ・一般演題（口演・示説）
- ・ランチョンセミナー（予定）
- ・懇親会

【1月24日（日）】

- ・理事長挨拶
- ・学術集会長講演：家族を支える在宅ケアとは　療養者と家族の狭間で
麻原きよみ（聖路加看護大学）
- ・シンポジウム　：家族支援の実際と家族・専門職のパートナーシップ
江頭　文江（地域栄養ケア PEACH 厚木）
香山　明美（宮城県立精神医療センター）
川越　正平（あおぞら診療所）
平原　優美（あすか山訪問看護ステーション）
小倉さなゑ（東京都中央区介護を考える会）
- ・総　　会
- ・特別講演：いのち輝く在宅ケアとは　専門職にできること
日野原重明（聖路加国際病院・聖路加看護学園理事長）
- ・一般演題（口演・示説）

なお、第15回学術集会は住居広土理事（県立広島大学）を学術集会長として、広島にて開催されます。